

1 学校として目指す授業

児童が様々なもの（既習事項・他教科・生活経験・他者の考えなど）を生かして、自分の考えを深めたり、表現したりできる授業
--

2 児童の現状

（１）「全国学力・学習状況調査」の分析（小学校 6 年生）

学力・学習状況調査の分析	生活習慣や学習習慣に関する質問調査の分析
平均正答率が高水準 国語・算数ともに、東京都平均や全国平均を大きく上回っている。平均正答数：9.6問 / 13問（全国平均：7.9問、東京都平均：8.4問）平均正答率：約74%（全国平均：60.9%）。 分布の特徴 正答数が高い領域（10問～12問正答）に多くの児童が集中しており、全体的に基礎～中級程度の力しっかり身につけていることが分かる。一方で、上位の得点層が厚い分、やや正答数の低い層（5問以下など）の児童への個別フォローも継続して行うことが望まれる。	学習意欲と主体的な学び 授業内容の理解度や、疑問点に対して自ら振り返り・再確認を行う質問においても、肯定的な回答が半数以上を占めている。自発的に考えをまとめたり、課題解決に向けて工夫して取り組んだりする姿勢が定着しつつあることが伺える。 教科への関心と課題 国語や算数などの主要教科に対する「好き・嫌い」「内容の理解度」についての質問では、肯定的回答が多いものの、一部で否定的な回答（「あまり当てはまらない」等）を選択する児童も一定数存在する。思考力や記述力を求められる発展的な内容において、個に応じた指導の工夫が引き続き期待される。

（２）都「学びに向かう力等に関する意識調査」の分析（小学校 4 ～ 6 年生）

授業理解度（項目1）は全教科で3.4～3.6と高く、多くの児童が授業内容を理解できている。学習理由（項目3）では「分かる・できることが楽しい（3.3）」「しっかり考えられるようになりたい（3.3）」「将来の仕事や生活に役立つ（3.4）」といった内発的動機や実用的な意識が高い一方、「人（他者）に負けたくない（2.3）」「ごほうびをもらえる（2.3）」といった外発的動機は低く、純粋な好奇心や自己向上心で取り組んでいる姿勢が見られる。「間違えた箇所や理由の確認（国語3.6、算数3.4）」や「復習・解き直しの継続」など、間違えた理由の確認や反省（振り返り）の数値が高くなっている。一方で、「他人の話や聞くときのメモ（国語2.8）」「読んだこと・考えたことを他人に説明する（国語2.8）」「問題文のないようを図や表、グラフで表す（算数2.9）」といった、思考のアウトプットや可視化、対話のアプローチはやや低めである。 教科全体の傾向（項目6）でも、「ねばり強く進める（3.2）」「工夫しながら進める（3.1）」「理解しながら進める（3.1）」に対し、「対話しながら進める（2.8）」が最も低い数値を示している。今後の課題は「対話」と「アウトプット（可視化・説明）」にある。自分ひとりで解き直すだけでなく、自分の意見をメモにまとめたり、図や表を使って考えを表現したり、他者と言語化して伝え合ったりする活動（対話的な学び）をより意識的に取り入れることで、学びの質がさらに深まると考えられる。
--

（３）その他の資料を活用した分析

活用した資料名及び分析結果
・教科に関するアンケート（学校評価）・ワークシート等 →教科に関する興味関心は高く、楽しく授業を受けている。しかし、適用問題やワークテストの結果に反映されず、知識の定着に結び付いていないことも見られるため、学習実態に応じた柔軟かつ丁寧な指導が必要である。

3 児童の学力・学習状況等の課題

・選択式問題に比べて記述式問題の正答率が落ち込む傾向にある。自分の考えや計算のプロセスを、指定された条件（キーワードや式）を満たしながら論理的に文章化・説明する力の育成が必要である。
・算数の二次元の表やグラフ、複数の提示資料から必要な情報を抜き出し、条件に合わせて分析・判断する応用問題の正答率を高めることが課題である。
・「思考・判断・表現」を問う問題において、思考プロセスを整理して解き進める深い学びの機会が求められる。
・平均より正答数が低い層（正答数5問以下など）の児童に対して、基礎の再確認や個別の学習支援を継続することが重要

4 学校全体の授業改善の視点

児童の主体性を高める指導の工夫 ・全体での共有だけでなく、ペアやグループでの対話活動を効果的に取り入れ、自分の考えに自信をもって表現できるようにする。 ・教科担任制による専門性の高い授業を行い、評価をこまめに行うことで児童の個々の状況を判断し、個に応じた指導を充実させる。 ・問題解決型の学習を取り入れ、自ら考え主体的に取り組む機会を増やす。 ・ICT機器を活用し、児童の自立的に学習に取り組む能力を養う授業を構想する。
--

5 各教科における授業改善の方策

	国語	評価	社会	評価	算数	評価	理科	評価	生活	評価	音楽	評価	図画工作	評価	家庭	評価	体育	評価	外国語	評価	道徳	評価
低学年	・読書に親しみ、「読むこと」「書くこと」「話す聞くこと」など、各領域の基礎基本を繰り返し定着を図る。 ・ペア学習を取り入れ、友達同士で考えを伝え合う学習を取り入れる。				デジタル機器を活用した教材提示を行い、図形や半具体物の動きを視覚的に理解させるとともに、共有や習熟の場面でもGIGA端末の機能を活用していく。				身近な話題を取り上げることや、体験活動を行うこと、GIGA端末を活用することなどを通し、自身に関係する問題として学習を捉え、自分自身や自分の生活について考えたことを表現できるようにする。		歌や楽器の演奏を通して、音楽の楽しさを味合わせる。		様々な学習グループで材料や方法などについて話し合う活動を題材ごとに設け、自分の見方や感じ方を広げるようにする。			ICT機器などを活用し、手本や練習方法を学べるようにする。また、友達に思いを伝えることで、上達のための様々な方法があること学ぶ。時間ごとに、振り返りの時間を設定するが、一定の運動量も確保し体力の向上を目指す。				・デジタル教科書の挿絵や動画を活用し、イメージしやすくする。 ・必要に応じて役割演技を取り入れたリワークシートに吹き出しなどを用いたりして、自分なりの考えをもたせやすくする。		
中学年	・課題提示や板書等を工夫し、視覚的に内容理解ができるようにする。ペア学習や小グループでの交流学習を取り入れ、他者と関わりながら自分の考えをもてるようにする。		・問いを自分事として捉えられるような資料提示を行う。 ・調べて気付いたことや分かったことを発表したり、話し合いの機会を設定したりして、考えを整理して表現できるようにする。		・デジタル教科書を活用した教材提示を行い、数や形について可視化し、理解を深められるようにする。対話を通して考えの過程を比較・共有する場面を習熟度別に設定し、論理的思考力を育む。		GIGA端末を用いた教材提示や事象提示の工夫をすることで、自ら問題を見いだしたり、生活経験に結び付けて予想ができるようにする。				様々な楽曲を演奏することを通して、曲想や歌詞の内容を感じ取らせる。		グループやペアで材料や使用方法、自分たちの作品などについて話し合う活動を題材ごとに設け、自分の見方や感じ方を広げるようにようにする。			ICT機器などを活用し、手本や練習方法を学べるようにする。また、友達に思いを伝えることで、上達のための様々な方法があること学ぶ。時間ごとに、振り返りの時間を設定するが、一定の運動量も確保し体力の向上を目指す。				・デジタル教科書の挿絵や動画を活用し、内容を理解させる。 ・ペアやグループで友達の考えを聞いたり自分の考えを伝えたり、ICT機器を用いたりして、他者との意見を交流しやすくする。		
高学年	・根拠をもって考えを書いたり、対話により考えをもったり深めたりできるように、具体的な書き方や文型等を用いて指導する。 ・教科横断的な視点での授業を心掛け、児童が学んだことを生かす機会をつくる。		・社会的事象に対して問いを見いだし、解決できるようにする。資料の精選や発問の仕方を工夫したり、自由進度学習を取り入れたりするなど、主体的に学習に取り組めるよう指導する。		・デジタル教科書を活用した教材提示を行う。対話を中心として考えを深める場面を習熟度別に設定し、GIGA端末等を活用して知識・理解の定着を図るとともに論理的思考力を育てていく。		根拠をもって仮説を立て、実験や観察の結果から共通点や相違点を見付けたり、予想と比較して考察したりできるように、話し合い活動を取り入れながら自分の考えを再構築し、表現できるようにする。				楽曲の演奏の中に自分の思い・表現を込める経験を重ねさせる。		様々な学習グループで材料や表現方法、自分たちの作品や著名な芸術作品などについて話し合う活動を随時設け、自分の見方や感じ方を深めるようにする。		ペアやグループでの話し合いなどを意図的に設定し、友達の考えを知り、自分の考えを深められるようにする。また、自分の生活に生かすという視点で問題解決的な学習を取り入れ、学んだことを実生活に生かせるようにする。		めあてや学習課題を明示し、自分の課題に対して課題解決の方法やポイントを考えさせる。思考させる場面や仲間と協働的に課題解決する時間を設け、「知る、見る、する、伝える」の視点を大切にしている。		・GIGA端末を活用して、外国語によるコミュニケーションに対する興味・関心を高める。 ・ペアグループ全体を始めとする学習形態の工夫により、「話すこと」に対する児童の自信を高める。 ・低学年から継続して、歌やダンスなどを活用し、英語の音声に慣れ親しむ。		・意見や話し合いの内容を分類し、構造的に板書することで、児童が考えを深める手がかりになるようにする。 ・他者との交流を通して自分の立場を明確にし、物事を多面的に考えられるようにする。	